

● 視点アジア



カンボジア北部トベン

レック村に集まった農民グループ。左手前が筆者＝1月

## [分かち合う世界へ]37、自助努力呼ぶ農民支援 アジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸

カンボジアのシェムリアップに行ったのは1年近く前だ。同国の全土に村落開発や農民支援のネットワークを持つNGOのFNN(農民と自然を守るネットワーク)に案内されて、町の中心から100キロほど離れた小さな村を訪れた。シェムリアップというアンコールワット遺跡群と国際的な観光地のイメージを浮かべがちだが、そこから少し離れると、貧しい農村地帯が果てしなく広がっている。

経済成長率が年7%を超えるカンボジアは、東南アジアの最貧国の一つという汚名を返上し、2、3年後には中進国の仲間入りをする勢いで発展を続けている。ここまで聞くと“すごい”と手をたたきたくなるが、半面、貧富の差が拡大し、社会格差がものすごい勢いで進んでいる。

国連の発表では、首都プノンペンの総人口の55%がスラムに住んでいるという。経済成長で雇用の機会が急増し、仕事を求めて首都に来た人たちが群れている。彼ら

のほとんどが日雇いで収入が安定せず、家を借り家賃を払うゆとりがなく、公園や川のほとり、道路沿いや空き地などに住み着いている。

こうした人々の多くは貧しい農村部からの出稼ぎ農民だ。平均月収が6千円程度の農業収入では、自分で生産したコメやわずかなおかずを食べて生きてゆくのがやっとだ。

多くは農業生産を改善して収入を増やしたいと望んでいるが、苦勞して頑張ってもPoverty Trap(貧困のわな)から長い間抜け出せず、もがいている。資本力がないから新しい品種や新技術を取り入れることができない。気候変動の影響で自然災害が頻発し、よほど慎重に技術を選び知識を身に付けないと、新しいチャレンジは高いリスクを伴うことになる。

冒頭で触れた、私たちが訪れた所はトベンレックという村で、10人ほどの農民で結成されたグループが待っていた。あらかじめ農民たちの自発と自助努力なくして支援は提供できない、と話していたので、われわれに会いたいと集まった人数は思ったより少なかったが、みんな目が輝き、やる気に満ちていた。

養鶏を始めるためのひよここと数カ月分の餌、簡単な道具や小さな鶏舎を建設する資材が欲しいという。それに要する経費は収入の中から2年かけて分割で全額返済するという。返済されたお金で回転基金を設立し、それをFNNが運用して新しい受益者たちの輪を同じような方法で広げ、持続可能で農民たちの自活自援を目指した支援を拡大・発展させる—というこちら側の提案に、FNNは強い意義と興味を示した。

こうした小さな取り組みがあちこちでたくさん起これば将来援助の効率が高まり受益者の自助努力を呼び覚まし、われわれが目指す持続可能な発展が可能になるだろう。

その後、賛同する農民グループの数がさらに増え、1年近くかけて練った事業計画が最近、完成した。来年はこの事業の実施にこぎ着けたい。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士(農学)。元国連食糧農業機関(FAO)事務局長補兼アジア太平洋局長。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人(非営利)アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。 2020/12/06

16:06